



スタイリッシュ・カリズマ

第三回

チェスターフィールド四世伯

中野香織=文

by Nakano Kaori

「ジェントルマンとは何か?」なんていう疑問をまじめに抱くと、ちょっとした深みにはまる。イギリスのある巨大な大学図書館には、ワンフロアを埋め尽くすほど膨大な冊数の古今の「ジェントルマン」本が存在するほどだから。そんな「ジェントルマン」を歴史的に解説しようとした数々の名著迷著のなかに、良きにつけ悪しきにつけ高い頻度で登場する18世紀の才人がいる。

その人こそ、チェスターフィールド四世伯(1694~1773)。

マナーやエチケット、立ち居振る舞い、人付き合いの知恵、そういった世俗的な些事を徹底して洗練し、それによって人望を集め、世俗の成功を収めた男である。彼は生涯かけて築いたその哲学、というか「俗世間で名をあげるための方法論」を、息子にあてて書いた膨大な分量の手紙に記す。のちに編纂されたその書簡集は、巷間で「ジェントルマン」として認められるための振る舞いを説いたマニュアルのような存在として今に読み継がれ、「チェスターフィールドイズム」という言葉まで生んでいる。

今月は、賛否両論浴びながらもイングリッシュ・ジェントルマンの典型像を考えるのに不可欠な人物、チェスターフィールド四世伯をめぐる話。

(注)「・卿」は爵位をもつ貴族に対する略式の敬称。平民に「・氏」とつけるのに対し、貴族は「・卿」となる。

チェスターフィールドイズム

チェスターフィールド卿の書簡集は、「わが息子よ、君はどう生きるか」(竹内均訳・三笠書房)というタイトルで日本語でも抄訳が読めるが、タイトルという装丁といい、すっかり日本の出版事情に合わせた「生き方本」として化けている。筆者がこの翻訳書を探し当てた図書館では「人生論」コーナーにひっそりと置いてあって、隣には「気配りのすすめ」が並べてあった。

あんまりである。礼儀作法や人間関係の具体的ハウトゥーを言語化し体系化した古典として、ローマ時代のキケロによる「礼儀作法論」や、16世紀イタリヤのカステリオーネが書いた「廷臣論」と並べても遜色ないはずの本なのに、この扱い。

とりあえず義憤を抑えてこの翻訳を読んでみると、これが面白い。現代でも通用する処世の法則が随所にちりばめられていて、読後は少し賢くなったような満足感を与えてくれる(実はこの錯覚こそが「生き方本」の罠なのだけれど)。

かゆいところに手が届くような表現も光っている。たとえば、「慇懃な態度で接しなさいとは、恋敵に嫌悪感を露骨に表わすような心の狭い人間には、とりわけ優しい態度で接しなさいという意味」という表現などどうだろう。「慇懃な態度」にまといつく、自己抑制から生まれる優越感と、相手に対する侮蔑と牽制のニュアンスを過不足なく理解させてくれるのではないか。

さて、チェスターフィールド卿はこれを出版しようとして書いたわけではない。もとはといえば、遠方で暮らす息子に対して、「完璧なジェントルマン」として成長してほしいとの期待をこめて、マナーとエチケットの細部にわたる具体的なハウトゥー、人望を集める法、人間関係の秘訣を、それこそ愛情をたっぷりこめてまめに書きおこした私信なのである。卿の死後、編纂されたこの手紙が、現代にまで読み継がれているのである。

私信としての性格上、彼の本音としての「世界観」というか「世の中観」も明らかになるのであるが、それは次のよう

なものだ。「知識も人格もはるかに劣った世智にたけた人たちが、優れているけれども世情にうとい人たちが、相手に気付かれないように上手に操るのが世の中である」。表だって発表すれば非難こうこう浴びたであろう「世の中観」である。これを前提として、俗世間で抜きん出たためのおきの秘訣を本音で語ったのが、チェスターフィールド四世伯の教えなのである。彼の教えの目的は単純明快だ。すなわち、実社会で成功するために、優れた人間になれ。人望を勝ちえて、抜きん出よ。

なかでも卿がもっとも重視するのが「人望を勝ちえること」である。「人望ほど合理的で着実な依りどころはない。一人の人間を押し上げるのは人々の好意であり、愛情であり、善意である。20歳から人生をやり直せといわれたなら、人生の大部分を、できる限り多くの人々に愛される努力をすることに費やしたいと思う」とまで書く卿だから、手紙で伝授される、卿が心身をすり減らして学んできた実践的秘訣が、重みをもって響かないわけはない。

卿はこの方法論ないし処世術を生前も自ら実践し、それによって世俗の成功を勝ち取っているのが、卿のやり方は、「チェスターフィールドイズム」と名づけられ、広く支持される反面、世俗を軽んじる知識人からは揶揄や嘲笑の対象ともなっている。たとえば同時代の代表的小説家、ドクター・サムエル・ジョンソンなどは「卿が教えるのは、売春婦の道徳とダンス教師の行儀作法である」となかなか手厳しい。もっともドクター・ジョンソンの場合、無名時代にチェスターフィールド卿の後援を求めて訪ねたが無視同然の扱いを受けた、という私怨があることも考慮に入れなければなら

ないのだが(この苦い経験からもチェスターフィールドはちゃっかりと教訓を汲みとり、「身分や地位の低い人を敵に回すな」という教えも残している。食えないおやじではある)。

人望を勝ちえる方法

ここまでもつたのだから、チェスターフィールド卿の具体的な教えの片鱗を紹介しないわけにはいかない。

チェスターフィールド卿によれば、人を喜ばせる原点は、相手を喜ばせようという気持ちにある。相手を喜ばすためには「さりげない気配りが自然にできる人になれ」と教える(それで図書館の書棚の隣に「気配りのすすめ」。その気配りというのが戦略的である。「相手のほめられたがっているところをほめよ。たとえば、美人に対しては知性をほめよ」。しかも、「陰ではめよ、しかもそれが確実にほめた相手に伝わるよう、言う相手を「選べ」とまで教える。ここまでいくと、えげつなさを感ずる戦略である)。

人の心をつかむ話し方

卿は、人の心をつかむためには、「五感に訴えること」が大切だと教える。「目を楽しませ、耳を楽しませ。そうやって理性を金縛りにして心を奪うのだ」。この悪魔のささやきすれ論理の線上に、人前で説得力のある話をするときの秘訣も語られていく。卿は「根も葉もついた話ばかりでは立派な実ばならない。学識豊かな世間知らずほど始末の悪いものはない」という考え方の持ち主

The Genealogy of the Stylish Charisma

であるから、当然、内容よりも話し方が重要、ということになる。

「人は、演説で何かを教えられるよりは、楽しく聞けることを選ぶ。元来教えられるというよりは、あまり自分の良いことではない。無知だと言われているようなものだから。演説がすんなり聞く人の耳に入り、人の賞賛を浴びるには、まずのごしうが良くなくてはならない」と枝葉の部分重視の立場を強調。でもまあ、この程度ならば、ひよっとすると現代の「話し方教室」などでも教えられているような常識なかもしれない。

感動も、次のようなタブーすれすれの助言である。「聴衆を過大評価しないこと。560人の議員のうち、思慮分別のある人間はせいぜい30人かそこらで、あとはほとんど凡人に近い。内容の濃い演説を求めているのはその30人程度の人間だけで、あとの議員たちは内容はどうであれ、耳に心地よい演説さえ聴ければ満足する」。

私信だからこそ書ける、よくぞここまでの本音。それゆえ、「演説者は、聴衆のありようまで左右できない。ありのままの彼らを受け入れるしかないのだ。そして彼らは五感や心をとらえるものだけを喜び、受け入れる」という言葉も、シニシズムではない一種のリアリティある説得力をもって響いてくる。

参考までに、チェスターフィールド伯四世は、上院議員時代には演説の名手として高い名声を博していたことを書き添えておこう。

人望を集めるための服装術

チェスターフィールド流服装術というものも当然、教えのなかに含まれる。その服装術においては、衆目を集めるための美装や個性を生かすファッションなどは論外である。人望を集めるための服装

術であるからして、こんな助言が与えられる。

「分別のある人は、服装に個性が出ないように気を配るものだ。自分だけ飛び抜けた格好はしない。その土地の知識人、その社会の人と同じ程度の格好、同じような服装をする。身なりが立派すぎれば浮いてしまうし、みすばらしければ、服装に気配りがされていないということでも失礼に当たるからだ」。

この論理、20世紀のビジネス・スーツにおける「個の消去」という狙いのひとつを先取りしている。

さらに、次の助言はどうだろう。

「いつも仕立ての良いもの、身体にびつたり合ったものを身につけること。さもなければぎくしゃくした感じになる。またいったんその日の服装を決定し、それを身につけたら、二度と服装のことは考えないことだ。組み合わせがおかしいのではないか、色の調和が悪いのではないか、などと考えていたら動作が硬くなる。いったん身につけたら、二度とそのことは考えず何もの身にもとつていないかのごとく、自然に気持ち良く動くことだ」。

どこかで聞いたことのあるフレーズだ、と思つたらダンディの元祖、ポー・プランメルが同じことを言っているのであった。もちろん、プランメルは後代、19世紀になってから現れるわけで、チェスターフィールドはプランメル流ダンディズムの遠い祖先でもあったことがわかる。

十八世紀中期の男性服

ここで、同時代の男性服の解説を。

1735年に描かれた「通人たちの集い」という絵画をご覧ください。当時流行した群像画（カンパセリオン・ピース）の形式で描かれた絵であるが、絵の中の紳士たちはそろってチェスターフィールド流流着ごなしとおぼしきスタイルである。



通人たちの集い

具体的にアイテムを解剖してみよう。

フリルのカフつきシャツの上に膝丈のウエストコート（袖つきのベストであるが、表からは見えない背中と袖は安物の生地でごまかしてある）を着用、そのうえにコート（上着）をまとうている。この上着、ウエスト部分でフィットし、そこから裾はサイドプリーツをつけて若干広がるように作られている。大きなカフスも当時の特徴のひとつ。フランスではこの上着「ジュストコール」（身体にびつたりと沿う服、の意）と呼ばれ、華麗な刺繍をほどこしてあるものが多い。足はストッキングの上にニー・プリーチズをはき、バックルつきでヒール高めめのスクエア・トゥの靴でまとめている。

17世紀末から18世紀後半にかけての男性服は、このタイプのベルベット製「スーツ」が基本スタイルであるが、髪型、というか、かつらの型は時代によって刻々変化している。絵の男たちは、髻粉をふいて白く見せたフルボトムのかつら。髻粉をふく儀式は、ステイブン・フリアーズ版「危険な関係」のオープニング・シーンや「アマデウス」などにも出てくるが、メガホン状「ノーズバッグ」で顔を保護して上から粉をふきかける、というけっこうまぬけなものである。18

世紀の後半、後ろに束ねて大きなリボンでまとめる髪型に変化したときも髻粉は不可欠だった。髻粉の原料には小麦粉が含まれており、貴族はふんだんにこれを装飾用として使っていたわけであるが、フランスではこれが食用の小麦粉すら手にはいらない下層階級の怒りをあおり、革命の一因を作ったとも言われている。

父の過大な期待を浴びた息子のその後

さて、チェスターフィールド卿の語に戻ろう。

書簡集のなかには、先ほど紹介した以外にも、いかにも「効くう」という感じで響いてくる卿の名助言が散らばっている。たとえば、

「一般論を語る人間を警戒せよ」
「物腰は柔らかく、意志は強固に」
「生きる知恵の基本は、感情を表に出さないこと」

「知らないふりをする」ということは情報を集める最高の方法でもある」
……などは、筆者も思わずメモしてしまつた言葉の一端である。

そこで気になるのが、こんなすばらしい教訓の数々を浴びるよう受け取つた肝心の息子のその後。息子は結局、どういう大人に成長したのだろうか。

そもそもチェスターフィールド四世伯は、外交官として、またアイルランド総督として活躍していた。上院議員も長年つとめ、ガーター勲章も受け、才人、雄弁家、著述家として名声を得た。息子の教育に携わり始めたのは政界を引退したあとであるが、実はこの息子のフィリップ・スタンホープ、庶子なのである。卿がハーグで大使を務めていたときに会つたフランス女性、エリザベト・ド・ブシエとの関係から生まれた私生児であった。卿はハーグから帰国後、金のために便

宜結婚をするが、その相手はジョージ一世の愛人だったドイツ女性の娘で、大金持ちだったベトロ・メルシナ。彼女との間には子供が生まれなかったため、チェスターフィールドは、自分の最後にして最大の仕事はフィリップ・スタンホープの養育にあると考えるようになったらしい。

フィリップは14歳で名門校ウエストミンスターでると、当時の貴族教育の慣習に従い、家庭教師とともに長期にわたる大陸旅行に送りだされる。卿が次から次へとフィリップに手紙を出したのは、この頃からである。これに対し、フィリップは長い返事を書くことを求められていたよつである。

しかし、卿の揺るぎない自信のもとに続けられたこの教育（「君は、わたしのよな忠実で友好的な目敏い監視装置を持って幸せだ。私の目から逃れるものは、何ひとつないと言つていい」と言い切る自信！）も、実際は卿の過大な理想の一方的な押しつけであつて、息子の感情や実情をまるで汲みとつていないものだった。

教育期間を終えて、フィリップが就いた仕事は何であつたのか？ それは卿が「おまえはたかだかラティスボン駐在地事務官にでもなりたいのか？」と書き送つた、まさにその「失敗例」の職であつた。哀れなフィリップは38歳でこの世を去る。そのときはじめて、卿は、息子が9年前に結婚して、自分には男の子の孫がふたりいたことを知るのである。

このうちの一人がA・F・スタンホープ、六代目チェスターフィールド伯である。この六代目は成長して、19世紀中頃のファッション・リーダーとして名を残す。今日、盛装用コートの代表格として知られるあのエレガントなチェスターフィールド・コートは、このチェスターフィールド六世伯に由来する。